

## ～3、11の震災、あれから10年経って～

グループホームえん／滝谷賢介

10年前の3月11日、越生で悠長に好きな梅を見ていたら、突然大きな揺れに見舞われ、出店していた焼きそばなどの屋台も全て閉じました。程なく東北が酷い事になっているとラジオで知り、大渋滞の中何とか家に辿り着きました。

翌日えんに出勤すると、小島代表が深刻な表情で「今回は大変よ、地震だけじゃなく原発事故も併発だから」と言っていたのを記憶しています。ほどなく東北の甚大な被害と犠牲者を知り、グループホームえんにも福島からの避難者をお迎えしました。定員オーバーを認めてもらった上だったため、一時でしたが、貴重な経験でした。記憶が薄れかけたころに入職した岩手出身者から壮絶な被災体験を聞き、東北復興応援バスツアーに参加し現地を見て、対岸の火事ではなく、当事者意識を多少は持つ事が出来ました。

私自身、阪神淡路大震災で祖母を失った経験があります。お別れも言えない最期でした。交通網が途絶えた中、がれきの中を祖父母の家に向かったことは一生忘れられません。平穏、平和、健康な日常が当たり前ではないのだと、痛感する毎日です。

昨年延期となった五輪の問題でも迷走を極めていますが、「震災や原発事故やコロナ禍で人々が苦しんでいるのに、五輪を招致＆開催するのは、家族1人が入院してるのに、家族旅行に行くようなもの」との新聞の投書に非常に共感を覚えました。

グループホームえんも開設して18年目、入居者は高齢化&重度化、スタッフもからだの故障が増えてきているなど、誰しも避けては通れない問題も表面化しています。どう人生を全う出来るのか、日々考えさせられます。長いコロナ禍の影響で、利用者方も外出や家族との面会の制限を余儀なくされ、我慢がコップから溢れ出しそうになる事もありますが、いつまでも悪い状況は続かないと信じて、えんの食卓の美味しいご飯を食べながら、今日の日常に感謝しつつ、入居者の方々と楽しみを見付けて行きたいです。

災害、紛争、貧困で苦しんでいる方々にも、想いを馳せつつ。



カット／えん細井美風